＜前回＞宗教改革の意義

（１）ルターの宗教改革

１．宗教改革の思想内容（三大スローガン）

「信仰のみ」（信仰義認論）、「聖書のみ」、「万人司祭説」

大切なことは、これら三つのスローガンが、それぞれ内的に連関し合っている点であり、ばらばらに理解すべきではない。

２．人間は何によって救われるのか？

・行為義認

・問題は、人は救いに十分なほどの善行を実行できるか、あるいは救いを実感できるのかという点である。ルターは修道院で苦行を実践するが、ついに救いを実感できず、精神的に追い詰められる中で、善行による救いについて根本的な懐疑を至る。贖宥状への疑問はこの文脈から出されたものである。

贖宥（いわゆる免罪符）の論理： 天国／煉獄／地獄、聖人・教会・功徳

・ルターは、最終的に、人間の救いは心からキリストの贖罪を信じることによってのみ可能になるとの結論に到達する。これが、「信仰のみ」というスローガンで意味される信仰義認論である。このような罪と救いの理解は、新約聖書のパウロに遡り、アウグスティヌスの思想系譜に立つものである。

・信仰義認論は、罪や恩寵についての実体論物的理解から、信仰者と神との関係論（罪や恩寵の精神性・内面性）への転換といえる。信じる心の純粋さという個人の人格性が問われることになる。

（２）宗教改革の歴史的位置

６．中世との連続性と断絶

「歴史的連続性の四つの線」（キュンク、199）

1)修道院のカトリック的敬虔。2)中世的な神秘主義。3)アウグスティヌス神学。4)オッカム主義。

７．宗教改革のプログラム：1520 年。宗教改革の綱領文書の成立。

８．宗教改革のパラダイム（キュンク）

1)神学の諸概念の変化（義認、恩寵、信仰、律法）あるいは放棄（アリストテレス的な自然学・形而上学の諸概念）。

2)伝統的規範・基準の移動：聖書、公会議、教皇の勅令、理性、良心。

3)伝統的な諸概念に基づくサクラメント論などの諸理論全体が、スコラ学的な方法論（思弁的・演繹的）が動揺。

↓

「聖書的・キリスト中心的な新しい神学概念」へ

1)神の新しい理解。それ自体の神ではなく、われわれのための神。

2)人間の新しい理解。義人であり同時に罪人。

3)教会の新しい理解。信仰者の万人祭司制を基礎とする、信仰者の共同体としての教会。

4)サクラメントの新しい理解。自動的に作用する儀式ではなく、キリストの約束と信仰のしるし。

↓

９．市民社会の宗教としてのプロテスタンティズム

「聖書のみ」の理念の実現のプロセスからわかるように、宗教改革の普及は、西欧世界の近代化プロセスと基本的に重なり合うものである。

10．近代的な自律性や人格性（人権）といった理念の成立基盤

（３）ドイツ農民戦争

12．理念と現実の緊張

三つのスローガンによって示された宗教改革の精神は、「理念」であって、ここに、キリスト教史において広範に確認可能な理念と現実のずれを指摘しなければならない。たとえば、聖職者と一般信徒との平等性の理念は、宗教改革の伝統に立つ教会においても、必ずしも十分に実現されていない現実がある。階層的秩序は存続している。それは、信仰の自己決定と聖書の情報公開に関しても同様である。

13. ドイツ農民戦争(1524.6 ～ 1525.11)の前史：１４世紀以来農民戦争は頻発
反封建的反教権的運動

14. ミュンツァー：ルターの宗教改革への共感と後のルター批判

15. 黙示的終末論の伝統
霊的体験（スピリチュアリズム）:「選ばれた者たち」、「霊的人々」、内なる聖書、熱狂主義、禁欲的
終末意識：神意による大改革、アンチキリスト
民衆運動：伝統的な教会批判、平民主義、積極的な社会変革（農奴制の廃止、祖税負担の緩和）

12. 宗教改革の多様性

１.「ルター派や改革派を主流派として特権化しそれ以外の改革の動きと区別する見方から、再洗礼派やカトリックも含めて様々な集団や個人がそれぞれの宗教的理想に基づいて様々なかたちでキリスト教の改革を行おうとしており、それらはどれも等しく『宗教改革』だったという見方へと変わってきているのだ。」（永守哲也ほか編『旅する教会――再洗礼派と宗教改革』新教出版社）

２. 宗教改革と続く宗教戦争によって混乱に陥った西欧の宗教地図（諸教派の地理的分布）もしだいに安定化に向かうことになった。30 年戦争が終結するころにはおおまかに次のような形で定着し、現在に至っている。
北欧、ドイツ：ルター派
オランダ、スイス：改革派
イギリス：イギリス国教会
イタリア、フランス、スペイン、ポルトガル、ドイツ南部、ポーランド：カトリック

（1）メインライン

３．ルター派：ルター、メランヒトン。改革派：ツヴィングリ、カルヴァン

４．ツヴィングリの宗教改革

出村彰『ツヴィングリ　改革派教会の遺産と負債』（宗教改革論集２）新教出版社。

「「宗教改革」と総称される十六世紀ヨーロッパの大変動」、「数十年にわたる激震はようやく収まってみると、ヨーロッパの宗教的分裂、その多元化は、決して無際限のものではないことも次第に明らかになってくる」、「十六世紀半ば以降のローマ・カトリック教会を、それ以前の「ルネサンス教皇庁」と同一視する以上に甚だしい誤りは考えられない」(12)

「人文主義と呼ばれる巨大な知的覚醒への関心」(15)

「十四、十五世紀の中世世界の崩壊期に直面して、その源泉へ立ち帰って再確認を果たそうとしたのが十六世紀だったとも言えよう」「キリスト教そのものの源に立ち帰り」(16)

「宗教改革とは何よりも先ず「説教運動」だった」(20)

「聖書が明白に命じていること以外は全て禁じられていると解釈すべき」「旧約と新約との間に齟齬がある場合には新約が優先すべきだというのが、この場合の実際的適用法であった」(22)

「微妙な方向転換」「新生児洗礼をめぐって」「たとえ漸進的であっても、体制の内側か

らの全体的刷新を図る路線への移行」、「弟子たちの一部が……多少の戸惑いと「いぶかしさ」を覚え始めた」、「一部の弟子たちの要求は、いわば直接制民主主義、大衆討論方式の導入に他ならず、チューリヒ都市共和国の根幹をなす代表民主主義の否定にまで連なると思われた」(23)
「「救貧法」によれば、働く意志と能力のある者は自らの手によって生活の糧を得るべきであり、この原則に、他人の善意にすがる生活の典型である修道制にまでも適用されねばならない」、「教育制度、殊に聖職者養成制度にまで及んだ」、「婚姻を教会の秘跡から外して「世俗化」した」(26)
「一五二五年をもってチューリヒの宗教改革はほぼ完成」
「チューリヒという都市共同体の内部に起こった事実上に宗教多元化を拒み、再び中世的な統合へ戻ったことに他ならない」、「以前のカトリックから福音主義へと置き換えられただけのこと」、「その内容は変わったとしても、構造的には連続している」(27)
「結果としての宗教と政治の分離、換言すれば宗教の私人化、政治の非宗教化への途である。長い目で見れば、ヨーロッパは、そして近代世界は、この方向へと進むことになろう。それが近代化そのものの指標にさえなるのである。しかし十六世紀の時点では、この選択肢はいかにも時期尚早と感じられた」(28)
「個人の宗教は依然として居住地に従属するのである」、「属地主義」(30)
「自己矛盾に陥った」(32)
５.「ツヴィングリは強硬な主戦論に立ち続けた」(33)
「従軍牧師として出陣した」「四十七歳の短い生涯」(34)
「再度の和議」「第二カッペル和議」「属地主義の再確認」(34)
「あまりにも短かった」、「その整備・完成の責務は第二世代、誰よりもカルヴァンの双肩にに負わされることになる。ツヴィングリその人は、まさしく矛盾・葛藤に満ちながらも、」(35)
６．聖書と説教
「十六世紀の説教者の大多数にとって、読むばかりに予め整えられた説教原稿を携えて講壇に昇ることは、実際問題として不可能だった。したがって、説教が手稿の形で残され、後世まで伝わることは稀有に近かった」「カルヴァンの場合は例外中の例外である」(38)
「ツヴィングリがエラスムスのこのような理解に負っていることには、ほとんど疑いの余地がない」(43)
「福音主義教会における倫理の再構築に際して、ツヴィングリがどこに力点を置かなければならなかったかは明白」(47)
「自然法の原理」「生まれつきの品性、人間の中に植え付けられている光から生ずる」(48)
「自然法は真の宗教以外のなにものでもない。すなわち、超越的な何ものかを認識し、それに向かって拝礼し、そして畏怖する思い」(49)
「自分がいかに邪悪であるかを知らない人間は、悔い改めることもない」(49)
「信仰は神の賜物であり、それをわれわれの内に呼び覚ますのは神の霊である」「選びが信仰に先立つ」「神は端的にその恵みによって救われる」(50)
「聴衆との連帯感」「一体性」「日常生活との親和性」(51)
「「神の似像」の本質を、言辞による人格的意思疎通可能性に求め、そこに聖書と口頭による伝達である説教を基礎付けようとしている点」、「ツヴィングリにあっては、比喩あるいは例話による分かり易さが人間の似像性にまで遡り、説教に不可欠の要素であることが知られる」、「短い絵画的な暗示法」「より長く詳細な比喩物語」(52)
「より高次の力が働いていること」「神の摂理が、すべてを・すべてにおいてなすとしても、それだからと言って、わらわれの行為や努力が過少視されるわけではない。神はわれわれを試されるが、その欲するままにのみ助けられる」(53)

「旧約聖書で実際に起こったことすべては、比喩(figura)として理解され、キリストにおいてこれらの比喩はすべて成就し、完全に実現した。……旧約聖書の内容は、単に史実で或だけでなく、また比喩でもある」(57)
「「大衆説教者」としてのツヴィングリの真摯で真剣な姿」、「信徒大衆の忍耐、その受容・理解の度合、日常生活への実際的適用・展開など」(70)
７．洗礼、再洗礼派に対して
「再洗礼派批判」「係争点を」「聖書解釈論」「礼典的洗礼理解」「および反社会性」「批判の三点に絞っている」(58)
「洗礼という語の四通りの用法」(59)
「再洗礼派の逐語主義的解釈の徹底と、彼らをも包含する十六世紀の市民共同体の成立基盤そのものとの矛盾」(60)
「霊の自由と肉の自由」「為政当局者による保護、統治は不可欠である」(62)
「洗礼」「それは確かに教会への帰属のしるしではあるが」「しるしが帰属を作り出すわけではない」、「信仰が救いをもたらすのではなく、救いと選びの『しるし』であるにすぎない」、「新生児洗礼の弁証、ないしは信仰[成人]洗礼の否認」(63)
「再洗礼派の分離主義・分派主義への駁撃」(65)
「要するに彼らは「徒党・分派の徒輩」であって、ここで禁じられているのが宗教的事柄であり、現世の統治についてではないことを黙殺している」「結局は再洗礼派がその本質において教皇主義に等しい」(67)
８．「ツヴィングリが激しく批判を加えたのは、平時でも諸外国から供与される莫大な年金によってますます富裕化する一部特権階級」「、及び無知蒙昧な青年らを甘言によって誘惑する傭兵隊長に対してであって」、「その政治・社会的態度決定に共感を覚えたからだったかもしれない」(88)
「農民たちが聴衆だったとすれば、一見何の変哲もない平易な聖書講解が、人心にゆっくりと浸透していくさまを垣間見る思いにさえならないだろうか」(89)

（２）再洗礼派
９．「宗教改革期に『正当な戦争』を放棄し『平和主義』(pacifism)に立ったのは、いわゆる宗教改革の急進派であった再洗礼派であり、その生き方はやがてメノナイト、クエーカーなどゼクテあるいはスピリチュアリズムのグループによって継承された。」「『平和主義』が影響を持つのは、『ゼクテ型』のキリスト教の影響力の強い地域であって、ヨーロッパよりはむしろアメリカである。」(近藤勝彦『キリスト教倫理学』教文館)
10．再洗礼派の思想的評価：トレルチによる先駆的な研究。
「分派型はプロテスタントやカトリックの教会精神と均しく異なった、キリスト教理論の独自の流れである」「価値判断を含意するわけではない」、「「教会型」も「分派型」も均しく「共同体形成的」」、「アナバプティストは、決して教会そのものの止揚を願ったのではない」「原初の純正さへの復帰を願ったのである」、「「教会型」とも「分派型」とも明瞭に対立するのが、第三の「神秘家型」である」(233)
「トレルチはアナバプティズムの起源を、ルターとの関連でツヴァカウ預言者たちにではなく、ツヴィングリのチューリヒに求めようとする」「ツヴィングリの信奉者中の過激グループ」(234)
「リッチュル」「中世末の敬虔主義運動」「殊に」「新しい敬虔」「フランシスコ修道会の第三教団」「在家修道的共同生活団」(235)
「リンゼー」「アナバプティズム運動全体は、骨の髄まで中世的である」「「祈りの輪」運動」「平信徒運動」(236)
「アナバプティズムの起源、または系譜」、「論者がアナバプティズムの名の下にいった

い何を想定しているのかに懸かっているという単純な事実である」（236-237）
「これらのアナバプティストが確かに、トレルチ流の定式にほぼ完全に合致すること」、「しかし」「ハンス・デンクの神学」「「分派型」に分類すべきか、あるいはむしろ「神秘家型」に属させるべきかが問題」「より上位の包括概念によってこれらを規定・表出しようとする動きは」「トレルチによるトレルチ超克の努力とでも言えるだろう」
11．トレルチ以降
「「宗教改革左派」という呼称」「ベイントン」（237）
「ベイントンが敢えて選び出した弁別の基準は、教会と国家との関係理解」、「左派」「教会と国家とを分離し、信教の事柄における俗権の介入を拒否する」、「大部分の左派は、政治権力が神によって樹てられ、悪の抑制者であることを進んで容認した」、「しかし」「俗権の介入は必然的に強制を伴い、強制は不可避的に真の教会の質の低下を招来するからである」（238）
「左派の諸グループに共通の心性」「倫理性」「原初主義」「終末論の強調」（239）
「ウイリアムズ」「Radical Reformation」（239）
「根源（radix）」「までに立ち戻ろうとする情熱」「現存の教会機構と神学から完全な脱却。離別を意図する壮大な企て」、「アナバプティストが、初代教会の復古という生活志向においていわば過去に生きたとすれば、他方、スピリチュアリストは、不可視的教会の来るべき栄光という未来に力点を置いた」（240）
「すべての類型化がそうであるように、いささか割り切れすぎる感がなくもない」（242）
「内部グループ」「フリードマン」「ベンダー」（244）
「フリードマン」「「キリストのまねび」の語によって表現させる解釈」「神の意志への無条件の服従」「実存的キリスト教」「キリスト教的体験の極度の具体性」（245）
「ベンダー」「三つの主要モチーフ」「キリスト教の本質をキリストの弟子たろうとすることを願い、かつ実践すること」「教会を「兄弟の交わり」とする理解」「最後に愛と無抵抗の新しい倫理」、「聴従（Nachfolge）」、「真の回心の体験と聖潔な生活への決断に基づく自発的教会」（246）
「二つの焦点を持つ楕円に譬えようとする」「キリストのまねびによる生の全面的変革」「キリスト教的生の充実を表現するための愛の交わり」（247）
12.「再洗礼主義が問題にしたのは、古典的プロテスタント神学の二大原理、すなわち形式原理としての「聖書のみ」」「並びに内容原理としての「信仰のみ」」「に加えて、この二大原理が実現される「場」（共同体）の原理だった」「宗教改革の貫徹を目指した」（270）
「二十世紀あるいは次の世紀にも全く無縁とは思えないのである」（271）
13．日本における再洗礼派研究。
書評：永守哲也ほか編『旅する教会――再洗礼派と宗教改革』新教出版社。
　宗教改革五百周年を迎える年に、さまざまな企画とならんで、宗教改革の本質に迫る意欲的な論集が刊行された。宗教改革後に誕生した再洗礼派の歴史の全体像を描く、最初の試みであり、少数者から見たもう一つの宗教改革史・近現代史・キリスト教史の出版を、キリスト教研究の関わる者として心から喜びたい。本書は、『福音と世界』における連載がもとになったものであり――私はこの連載の愛読者だった――、プロローグとエピローグ以外の収録された二四の論考は、一つ一つの論考は連載サイズで決して長くはない。しかし、簡潔で内容の詰まった二四の論考は相互に結び付くことによって、多岐にわたる再洗礼派の歴史全体を鮮やかに浮かび上がらせている。最近日本語で読める再洗礼派についてまとまった研究はすっかり稀になった感がするが――メノー派やアーミシュは比較的有名だろうか――、読者は、宗教改革のもう一つの歴史について、最新の研究に触れることができる（各論考に付された注や関連年表は有益である）。宗教改革に関心のある方には必読の一冊と言えるであろう。

本論集は、次のような三部構成になっている。第１部「再洗礼派の誕生と受難」では、宗教改革後の再洗礼派誕生から、多様な諸運動を内包しつつ動き出した初期の歴史が描かれる（一六世紀)。第２部「再洗礼派の諸相」では、再洗礼派のネットワーク（前史と空間的な広がり)、また讃美歌集や殉教者列伝など、再洗礼派のさまざまな具体的な姿が叙述され、第３部「近代化する社会を生きる再洗礼派」は、再洗礼派内の主要宗派形成以降の、１７世紀から現代までの歴史が辿られる。読者は、宗教改革から近世・近代にかけての再洗礼派諸派の動向がヨーロッパから新大陸、そして全世界へと続く「旅する教会」に触れることができる。以下、本書の魅力的な内容の一端を紹介したい。

そもそも宗教改革とは何だったのか。それは、ルターの九五箇条の提題において突然はじまり、その影響の下でその後多様な仕方で展開された諸教派の総体なのであろうか。本書が提出する宗教改革理解は、これとは大きく異なっている。宗教改革を、突然起こった大事件ではなく、14 世紀頃から 16 世紀初頭にかけての歴史的文脈に位置する「長期的変化の一過程」として理解するという立場であり、それは唯一正しい宗教改革という見方の転換を迫るものとなる。ここに提出されるのは、再洗礼派やカトリックも含めて、「それぞれのやり方で宗教改革を行おうとする人々が」存在したのであり、例えば、再洗礼諸派、心霊主義者、反三位一体論者などは「どれも等しく「宗教改革」だったという見方」なのである。したがって、たとえば「カルヴァンの思想と再洗礼派のそれの間に横たわる大きな溝は、つまるところ両者の人間観あるいは教会観の違い」にあるのであって、どちらかが正統でどちらかがが異端といった関係ではない。

本書で強調されるのは、再洗礼派は、多様で流動的な運動を包括したものであって、「幼児洗礼を避け信仰洗礼を行うことについては一致していたが、それ以外の教えや信仰生活の仕方については必ずしも一致していなかった」ことである。再洗礼諸派においては、広く財産共有制や非暴力主義が共有されているが、ミュンスター再洗礼派の場合など集団放棄を行う事例も存在する。心霊主義への距離や忌避破門の評価も分かられている。最近は、再洗礼派の起源については複数起源説が主流とのことである。

近世の国教会・宗派化から近代国民国家へ

14. 再洗礼派という宗教的少数者の視点から、近現代史を見る意義。

殉教者を生み出した信仰

「全員が洗礼を受けていることを前提とした既存の社会や教会の基盤を根底から揺るがすことになりかねない」

近代以降の世界において多様なキリスト教が直面した問題は、先鋭化された形で認められる。

信仰的信念を生きる可能性を求めた旅

「宗教改革以降の西欧では、複数の宗派が併存していた。領邦や都市当局は、・・・特定の宗派を公認し、領邦や都市の国教会を作った」、「公認教派の教義や儀礼、価値観を領内で浸透させ、宗派的統一を確立しようと試みた。こうした動きを「宗派化」と呼ぶ」(169)

「宣誓や軍役といった臣民の義務」(170)

「再洗礼派のような宗教的少数派もまた、16 世紀を通じて次第に自分たちの宗派的アイデンティティを確立させていった」、「討論会もまた、彼らの神学的アイデンティティの確立を促進した」(171)

15. 「近代」「欧米諸国」「市民的平等」「国民」「再洗礼派は信仰を理由に迫害を受けることはなくなった」

「国民国家の政府」「徴兵義務」「公教育」

「20 世紀に入ると、社会も急速に変化」(265)

「再洗礼派の歴史は、16 世紀以降西洋で宗教と社会の関係が大きく変化し、信教の自由が確立されるまでの過程を、宗教的少数派の側から見たもう一つの近現代史」(266)

「宗教改革史も西洋史を越えて世界史の一部となりつつある」(267)
「グローバルな再洗礼派の歴史を考える際に重要なのが、再洗礼派のグローバル化は、キリスト教のグローバル化の一部だと言うことだ」
「教会の中心が非西洋圏にへと移りつつあるのも、再洗礼派だけでなくキリスト教全体の傾向だ。再洗礼派の歴史は、宗教改革史だけでなく、キリスト教全体の歴史の一部でもあるのだ」(268)
「再洗礼派教会が世界中に広がったのは、19 世紀半ば以降の世界宣教が成功したためだった」、「メノナイト世界会議」(245)
「「グローバルな家族」を作るための道」(246)
16.「彼らの旅を通して、宗教的少数派と国家や社会の関係が、西洋でどのように変化したかが浮かび上がってくるだろう」(15)
「土着化するキリスト教」と「旅するキリスト教、旅人の神学」

（３）カトリックの宗教改革
17. 宗教改革はプロテスタント教会を生み出しただけでなく、カトリック教会の近代化に道を開いた。
18. 対抗宗教改革・トリエント公会議（パウロス３世。1545 年から 1563 年）。
・教皇の至上権の確認、腐敗防止（贖宥状の禁止、しかし、贖宥の意義は確認）、禁書目録の作成と宗教裁判所の強化
・７つの秘跡について確認（実体変化）、ウルガータ訳が正典であること。
↓
教皇庁への権力の集中、教会行政の中央集権化＝近代化。
19. イエズス会（イグナティウス・ロヨラ。1540 年に認可）
・カトリック教会の刷新の一翼を担ったのが、1534 年に「教皇の精鋭部隊」としてイグナチオ・デ・ロヨラ（1491-1556）らによって創設されたイエズス会である。イエズス会は、教皇パウロス 3 世により正式に認可されたが（1540 年）、高等教育を中心とした教育活動と社会正義事業を推進することによって、プロテスタントに対するカトリックの防波堤として活動した。特に注目すべきは、イエズス会が世界各地への宣教活動を重視した点である。宣教と教育。
・カトリック教会の勢力回復に貢献。南ドイツのカトリックへの復帰と海外宣教。

＜参考文献＞
１．Ａ．Ｅ．マクグラス『宗教改革の思想』教文館。
２．日本ルター学会編『宗教改革者の群像』知泉書館。
３．久米あつみ『カルヴァン』（人類の知的遺産）講談社。
４．渡辺信夫『カルヴァンの『キリスト教綱要』を読む』新教出版社。
書評的紹介：http://www.bun.kyoto-u.ac.jp/user/sashina/sub14h1.pdf
５．出村彰『カルヴァン――霊も魂も体も』（宗教改革論集１）、『ツヴィングリ――改革派協会の遺産と負債』（宗教改革論集２）新教出版社。『再洗礼派』日本キリスト教団出版局
６．永守哲也ほか編『旅する教会――再洗礼派と宗教改革』新教出版社。
７．Ernst Troeltsch, *Die Soziallehren der christlichen Kirchen und Gruppen*（Gesammelte Schriften 1）, Scientia Verlag, 1911.
８．Peter G. Wallace, *The Long European Reformation*, Palgrave, 2004.
９．Donald K. McKim（ed.）, *The Cambridge Companion to John Calvin*, Cambridge University Press, 2004.

10. Kenneth J. Stewart, *Ten Myths About Calvinism. Recovering the Breadth of the Reformed Tradition*, IVP, 2011.
11. Michael G. Baylor（ed.）, The Radical Reformation, Cambridge University Press, 1991.